

ローマ5章1-11節 「栄光の希望」

1A 神との平和 1

2A 神の栄光の希望 2-5

1B 恵みへの接近 2

2B 患難のもたらす希望 3-5

3A 不敬虔な者のための死 6-8

4A 御怒りからの救い 9-11

本文

ローマ人への手紙 5 章に入ります。私たちは 3 章から、律法の行ないとは別の、信仰による義について学んでいます。4 章では、どのようにしてアブラハムが義と認められたのか、その具体的な生涯によって、信じることによって義と認められる例を見ることができました。そして 5 章ですが、ここにおいては、信仰によって義と認められることによって、どのような結果がもたらされるか、その結果について読むことができます。

もう一度、義と認められることについておさらいしたいのですが、第一に、その義は神からの贈り物だということです。神の義がキリストにあって、私たちに転嫁されました。ですから、それは私たちの内にある正しさではなく、神ご自身の正しさであります。それを贈り物のようにいただいたのです。第二に、その理由はもっぱら神の恵みに拠ります。3 章 24 節で、「ただ、神の恵みにより」とあります。神がその大らかな憐れみに満ちたご性質から、私たちにただ良くしてやりたいという動機で、私たちにご自身の義をくださったのです。私たちが、神に何かをもらえるための良いものがあったからではありません。第三に、義と認められるのは、信仰によります。行ないではありません。信じることによって、その信仰が義と認められます。ですから、神からよく見られたいと思うのでしたら、行ないではなく、神を信じ、この方の前にひれ伏し、自分を明け渡すことです。

そして、第四に、義と認められるために、キリストの血という代価が支払われました。私たちの行ないによって償ったものではありません。義と認めるとは、全く罪を犯したことがない、無罪であるということですが、神は正しい方であり、罪人を義と宣言することは、ご自身の性質に反する行為です。しかし、神はご自身の内でその義を満たされました。ご自分の御子キリストが罪に対する報いを、身代わりに受けられたので、その義の要求が満たされたのです。ゆえに、私たちを義と宣言することは、ご自身の義に違反することなく、そうすることができます。それでは、5 章、こうして義と認められた結果を見ていきましょう。

1A 神との平和 1

5:1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神と

の平和を持っています。

義と認められたことによって、第一に、神との平和があります。神のみこころに逆らっている罪人は、神と敵対関係にあります。言いかえると、神と戦争状態にあります。ですから、神はご自分の義によって私たちをさばき、滅ぼしてしまわなければなりません。私たちは、キリストが再臨される時に、反キリストと諸国の王と戦われる場面を黙示録 19 章で読みます。私たちは、勝ちようのない全能者であられる神に、いつまでも反抗し、反逆していました。けれども、私たちは義と認められたので、神との間に平和があります。ですから、パウロは8章において、「神が私たちの味方であるなら、だれが私に敵対できるでしょう。(31)」と言っています。神は、もはや私たちを咎めたりしておられません！

ちなみに、神との平和は、「神の平安」とは異なります。神の平安は私たちが経験するものであり、恐れや思い煩いから自由にされている状態のことを指しますが、神との平和は、もうすでに築かれている神との関係です。

2A 神の栄光の希望 2-5

1B 恵みへの接近 2

5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。

導き入れられた、とありますが、神のみもとに導き入れられる、ということでもあります。これが第二の結果です。義と認められたことによって、神の御前に大胆に近づくことができる、と言うことです。英語では、“access”という英語が使われています。アクセスできる、接近できるということです。ちょうどこれは、王の前に出ていくことのできる大きな特権を表しています。エステル記において、王妃エステルが王からの好意を得て、内庭に出てきた時に、本来なら殺されて当然だったのに、金の笏を差し出してもらえた、という状態です。もし、王が罪ありとみなしたら、その場でたちまち殺されてしまいます。

ですから、私たちは神の前に立つことができます。それは罪を咎められないから、そこに大胆に立っていることができます。黙示録 6 章の最後で、地上に大きな患難が下っている時に、そこにいる者たちが、「御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」と叫んでいます。この耐えられる、という言葉が、立っているという意味です。神が不義に対して怒りを示し、その栄光を表しても、私たちは恵みによって義と認められていますから立っていることができます。パウロは、エペソ人に手紙を書いて、「私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。(3:12)」と言いました。

そして第三の結果は、神の栄光を見て、大いに喜ぶということ。大いに喜んでいて、という言

葉は、爆発的な喜びを指しています。心が張り裂けんばかりの喜びです。神の栄光を望んで、喜びおどるのです。私たちに与えられているもっとも大きな祝福は、神の栄光を見ることです。神のすばらしさ、神のすべてのご性質を見ることが許されました。

これは、主イエス・キリストが再び私たちのために来られるときに実現します。パウロは、「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。(I コリント 13:12) 」と言いました。使徒ヨハネは、「キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。(I ヨハネ 3:2) 」と言っています。私たちが、主イエスさまをはっきりと見て、この方のふところのなかに入る日は、確実に近づいているのです。

2B 患難のもたらす希望 3-5

5:3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

ここから、神の栄光を望んで大いに喜んでいますが、患難をもそれを妨げることはない、いや、患難さえもがその希望を生み出すのに用いられるということです。ちょうどこれは、ヤコブの生涯と同じです。彼はエサウから逃れて、旅に出ました。そこで天のはしごの夢を見ました。大いなる神の栄光またその祝福の言葉を聞きました。そして主が旅の間、共におられることを彼は知りました。しかし、彼が実際に約束の地に戻ってくるまでの二十年の間、彼の生活は苦労ばかりでした。そして最後は、エサウと会わねばなりません。彼は、そのために御使いと格闘するところまで来たのです。しかし、そこで彼のももの関節が外され、彼は弱くされましたが、しかし主の栄光を見たのです。そしてエサウとも和解でき、そして主が確かに自分に対して約束を果たされることを、ますますその確信を強めました。

このように、私たちのこの世で受ける患難は、その与えられている栄光の希望をさらに抱かせる、大きな原因となっています。これは霊的成長をもたらします。「ヤコブ 1:2-4 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」

患難というのは、私たちに忍耐を生じさせます。忍耐という意味そのものに、困難がある、苦しみや試練、不都合なことがあるということになります。忍耐は神のご性質そのものです。それから、「忍耐が練られた品性を生み出し」とあります。試練を通ることによって、そこで主のみ拠り頼むという、純粋な信仰へと導かれます。もし試練がなければ自分に頼っている、他のことに頼っている

けれども、試練によって主に投げ頼むように純化されます。「1ペテロ 1:6-7 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と栄光と栄誉に至るものであることがわかります。」

それから、「練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」とあります。練られた品性が希望を生み出すのは、この方のみ希望を見出す、他の何物でもなく、主との交わりの中に喜びがあるのだ、ということを知るからです。主こそが希望であるのですが、品性が練られているからこそ、その交わりを楽しむことができます。

そして、「この希望は失望に終わることがありません。」とあります。神の約束が違ふことなく、必ず実現する。患難の中でも耐え忍んで信じていて、後にあつてその通りにならずに、恥をかくことになる。そんなことは起こらない、ということです。十字架に主がつけられ、葬られた後に、弟子たちがユダヤ人を恐れて戸を閉めていたのですが、その時に主が真ん中に現れてくださいました。彼らは恥をかいたのですが、しかし主は裏切ることをなさらなかった。希望は失望に終わりません。

そして、その信仰の旅において、聖霊が私たちを助けてくださいます。「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」神の愛は、聖霊によってのみ悟ることができるものです。これから6節から、なぜこれが人知を超えた愛なのかを見ることができます。したがって、聖霊に拠らなければこの愛は分かりません。聖霊が助けてくださり、私たちが神の栄光を見て、大いに喜ぶその力を与え続けてくださいます。「エペソ 1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。」

3A 不敬虔な者のための死 6-8

5:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。5:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

主は、「私たちがまだ弱かったとき」死んでくださいました。私たちが肉の弱さで、もう駄目だと思う時がないでしょうか？その時に思い出していただきたいのは、主がその時に死んでくださったということです。そして、「キリストは定められた時に」とあります。パウロが3章で次のように説明しています。「3:25-26 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるた

めなのです。」

そして、キリストが私たちのために死んでくださいました。神は私たちに愛を示されました。死ぬほどに愛してくださったのです。愛といっても、いろいろなことをして愛する方法はあると思いますが、友のために死ぬこと、これほどに大きな愛はないと主が言われたように、命を捧げるというのは愛の行為です。

しかし、このような話しは人間の中でも聞きます。父親が、息子のために自分のいのちを捨てる、という類のものです。けれども、これら人間の愛とは比べることができないほど神の愛が深いことを、パウロはここで説明しています。つまり、私たちが不敬虔であるのに、罪人であるのに、キリストが死んでくださったのです。親は自分の子のためなら死ねるでしょう。けれども、自分の子を殺した人のために自分の命を捨てることはできるでしょうか？これが神の愛です。つまり、私たちの側には、何ら愛すべき特徴や原因はないのに、いや憎むべき原因がいくらでもあるのに、いのちを捨ててくださいました。この神の深く、広い愛があるために、この愛を聖霊が注いでくださっているために、私たちは、神の栄光を待ち望む希望を抱きつづけることができるのです。

4A 御怒りからの救い 9-11

そこで、私たちが最後まで、この与えられた愛の保証によって救いを与えてくださるというのが 9 節から 11 節です。

5:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

5:10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

5:11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。